

『雨宿りはふたりで』

著：真崎ひかる

ill：小椋ムク

「物珍しそうだな。こういうところに、あまり慣れていないのか？」

「そうでもない。ここは、初めてだけどっ」

この種類のホテルに入ったこと自体、初めてだ。

でも、バカ正直に本当のことを言えばつまらないヤツだと背中を向けられそうで、また一つ嘘を重ねる。

博人は、言葉の裏を探るような目で郁海を見下ろしていたけれど、追及することなく手を伸ばしてきた。

大きな手で頭を挟まれて、トクンと心臓が大きく脈打つ。

「立候補してくれたが……本気か？ キスは？」

「ど、どうぞっ」

この答えで正しかったのかどうか、わからない。博人は少しだけ眉を寄せて、端整な顔を寄せてきた。

ギュッと目を閉じると、唇にやんわりとしたものが触れる感じがする。軽く押しつけられただけで離れていき、伏せていた瞼(まぶた)をそっと持ち上げた。

郁海と目を合わせた博人は、なにを考えているのか読めないポーカーフェイスだ。唇を合わせてきたくせに、それ以上なにをしようとするでもない。

「あのあたりをうろつくにしては、変わったタイプだな。この……脱色やカラーリングをしていない黒髪は、かえって目立ってたぞ。服装も、立ち居振る舞いも、育ちのいいお坊ちゃんって感じだ」

大きな手で郁海の前髪をかき上げて、まじまじと顔を凝視してくる。

博人のほうこそ、適当な『遊び相手』を求めるタイプではないように見える。女だろうが男だろうが、恋人に立候補する人は列をなしていそうだ。

「さて、なにを企んでいる？」

「企む、って変な言い方。おれは、お礼がしたかっただけだ。えっと……脱げばいい？」

話しながら、一つ二つ外したところで中断していたシャツのボタンに指を伸ばす。残り二つというところで、何故か指に力が入らなくなって……もたもたしてしまう。もどかしさに耐えられなくなり、捲り上げて頭から抜いた。

「おい」

博人が短く口にしたけれど、聞こえていないふりをして今度はジーンズに手をかける。……どうして、うまく指が動かないのだろう。指先が小さく震えて、ウエスト部分の固いボタンを外せない。

「郁海」

低く名前を呼ばれたことで、ビクッと手を震わせて動きを止めた。恐る恐る顔を上げると、博人は陰しい表情で郁海を見下ろしていた。

「慣れていない……もしかして、まったくの初心者だな？ 十八というのも、嘘だろう」

「う、そ……じゃ、ない」

「見え見えなんだよ。せつかくの据(す)え膳(ぜん)だが、ビギナーは相手にしない主義なんだ」

「なんでっ？ おれが、いいって言ってるのに」

「初心者に気遣うことができるほど、イイ人じゃないんでな。それに、初めては良くも悪くも記憶に残るだろう。そんな重い相手、ごめんだね。俺は基本的に女でも男でもどちらでもいいが、後腐れなくその場限りの関係を持てるという理由で、疲れている時は特に男を選ぶんだ。それなのに、わざわざ後腐れができそうな初心者を相手にしたくない」

博人は、淡々とした調子で理路整然と語る。郁海はなにも言い返せなくて、キュッと唇を噛んだ。

後腐れができそうだというセリフを、否定できない。きっと……記憶に焼きつく。既に、手遅れかもしれないと思っているほどだ。

こんなに強烈な印象を郁海に与えた人は、これまでいなかった。うまく説明できないけれど、今まで逢ったことのあるどんな人とも違う……。

言葉を失う郁海はどんな顔をしていたのか、博人は顔を歪ませて郁海の頭を挟み込んでいた手を離した。

「考えられない、って顔だな。最低な男だろう。……あそこでなにをしていたのか知らないが、もう場違いなところをうろつくなよ。おまえみたいなのは、鴨(かも)がネギを背負っているようなものだ。タチの悪いのに引っかかってどんな目に遭うか、わかったもんじゃない」

「でもっ、博人さんは助けてくれた……」

「たまたま、そういう形になっただけだ。あー……今日は厄(やく)日(び)だ。職場は予定外のものでゴタゴタするし、憂(うれ)さ晴(は)らしをしようと思ったら子供を拾(ひろ)うし……極(こ)めつけは、雨(あま)だ。シャワーを浴(あ)びて、一杯(いちぱい)飲んで寝(ね)るか。おまえは、適(た)当(た)に帰(かえ)れ」

そう言った博人は、郁海に背中を向けるとベルトを外してスラックスを脚から抜く。スーツの上着やネクタイをかけてあるハンガーラックに吊(か)るすと、シャワーブースに足を向けた。

その動作からは、色気を感じない、彼自身が言ったとおりに、郁海など『相手にならない』と態度で示している。

歩きながら白いシャツを脱ぎ落とすと、動く気配がないことに気づいたのか立ち尽くしている郁海を振り返る。

「郁……」

「終電、もうない……し、傘(かさ)も、ないし」

いつまでそこにいる、等(と)。郁海の存在を疎(うと)ましがる言葉が博人の口から出る前に、だからここを出ていけないのだと、言い訳を口にする。

なにか考えているような間(ま)があり、博人は仕方なさそうに口にした。

「見てのとおりに、ベッドは一つしかないからな」

「う、うんっ。おれは、博人さんと一緒に……一緒にいいよ。始発(はつぱつ)が動きだしたら、出ていくから……」

発言(はつげん)を撤回(ていしやく)される前に確定事項(ていぎつじこう)にしてやれ。

そう勢(せい)い込んでうなずくと、博人は仕方なさそうに大きく息(いき)を吐(つ)く。

「……蹴るなよ。犬の子でも拾ったと思うか」

そんな妥協策に行き着いたらしい。

自分に言い聞かせるようにつぶやいた博人は、郁海を振り返ることなくシャワーブースの扉を開けた。

躊躇う様子もなく残っていた服を脱ぎ捨てる様を見ていられず、どぎまぎと目を逸(そ)らす。

同性の裸など、珍しくもなんともない。郁海が通う高校は男子校で、体育の際の着替えを堂堂とすることはもちろん、夏場だと上半身裸で授業を受ける猛(も)者(さ)もいる。

それなのに、チラリと目にした博人の身体は郁海が知る誰とも違って……心臓が激しく動悸を響かせている。

「ベッド、使っていいってことだね」

落ち着かない気分を誤(ご)魔(ま)化(か)すように独り言をつぶやき、そそくさとジーンズを脱ぎ捨ててベッドに潜り込んだ。

シャワーの水音が、やけに意味深に聞こえる。

雨だけでなく、川の流れや滝の落ちる音……シャワーの水音も苦手だ。雨の夜は、眠れば必ず悪夢にうなされるので、ほとんど眠ることができない。

でも今は、この水音の中に博人がいるのだと思うだけで、胸の奥がむず痒(がゆ)いような奇妙な思いが渦巻く。

「なんか、ドキドキする」

たとえるなら、ゆっくりと傾斜を上がるジェットコースターの座席に座っているみたいだ。

ベッドの中で身体を丸くして、不安と紙一重の高揚感に浮き足立つ……不可思議な心地に漂っているうちに、うとうとしていたらしい。

かすかに身体が揺れる感覚に、ビクッと全身を震わせた。慌てて目を開いて、背後を振り返る。

ベッドヘッドのところにあるランプが淡い光を放つ中、博人がベッドに乗り上がってきた。

水と……石(せつ)鹸(けん)の入り混じった、清涼感のある匂いが鼻をくすぐる。

「……寝込みを襲う趣味はないから、気にせず寝てろ」

抑揚のあまりない声でそう言うと、郁海の隣に身体を横たえる。そろりと寝返りを打った郁海は、博人に身体を向けて小さく言い返した。

「寝、られないかも……だけど」

「寝られない？」

「雨の夜は、たいいていそうだから」

「……奇遇だな」

ポツリとつぶやいた博人は、『自分もそうだ』と続けようとしたのだろうか。待っていてもそれ以上の言葉はなく、郁海のほうから聞き返すことはできない。

窓のない部屋は、外の音を完全に遮断している。幸い苦手な雨音は聞こえないのに、やはり眠れそうにない。

静かだった。もしかして、博人は眠ってしまったのだろうかと思い始めた頃、小さな声が聞こえてきた。

「二度と、あの界限に近づくな。……忘れろ」

忘れろ？

それは、あそこで中年男に絡まれたことか……博人自身のことなのか。確かめることができず、答えることもできない。

眠れないと言ったけれど、寝たふりをして聞かなかったことにしよう。

そう決め込んで、口を噤(つぐ)んだ。

本文 p34～41 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>